

情報から見たヒューマニティと自由

—解釈学／ロゴセオリー／基礎情報学の視座—

竹之内 禎

はじめに

「自由」をテーマに論じた 20 世紀を代表するヒューマニストの一人としてヴィクトール・E・フランクルがいる。本論文では、ヒューマニティと自由に関するフランクルの議論を基礎情報学の観点からとらえ直し、21 世紀型の「ヒューマニティと自由」論への手がかりを考察する。1 章では、議論すべきヒューマニティという概念について、ハイデガー・ガダマーの解釈学の観点から考察し、カパーロに至る解釈学的情報学の展開について述べる。2 章では、ハイデガーに影響を受けたフランクルの議論から、人間存在の本質についての考察を得るとともに、その限界について論ずる。3 章では、フランクル思想の理論面(ロゴセオリー)におけるヒューマニティ論の特徴的論点を、西垣通の基礎情報学の観点から再解釈し、21 世紀型の「ヒューマニティと自由」に関する考察に向けた理論的な手がかりを得る。4 章および 5 章では、社会的な次元における「ヒューマニティと自由」の問題事例として、言論・表現の自由、ならびに情報アクセスの自由に関する世界規模の問題について考察する。

1 解釈学：ヒューマニティとヒューマニズム

ヒューマニティ(humanity)とは、「人間存在(の本質)」「人間性」を表す言葉である。21 世紀に生きる我々は、交通と通信が地球規模で実現した世界に生きている。そこでは、単一の善は独善となり、そこにおさまらない多様な価値観の包含・共存こそが課題となる。それゆえ、21 世紀型の多様なヒューマニティの考え方は、まず、単数形のヒューマニティではなく、複数形のヒューマニティーズ(humanities)として探求されなくてはならない。ヒューマニティの複数形である humanities は、英語で「人文科学」を意味する言葉である。人文科学は、周知のとおり、哲学・歴史・文学といった精神活動の所産について研究する学問分野である。ドイツ語では「ガイステス・ヴィッセンシャフテン(Geistes- wissenschaften)」と呼ばれる。直訳すれば「精神科学」であり、哲学分野ではこの直訳で論じられることも多い。すなわち、精神活動の所産を研究する精神科学(=人文科学)は、自然科学の論理的・方法論的な手続きとは異なった「理解」の枠組みや基盤を持つという解釈学(hermeneutics / Hermeneutik)の議論である。つまり、精神的所産の「理解」は、論理的な思考だけ

でなく感性を含む総合的な認識として成立するもので、その背景となる世界観を含めて精神的所産に対する「理解」のあり方を研究し、それを通じて人間存在の本質に迫ろうとする哲学分野が解釈学なのである。

解釈学は、実践的な文献解釈学から、シュライアーマッハーの一般解釈学へと展開し、ディルタイの理論化を経て、ハイデガーによって人間存在論の方法論として再定位され、ガダマーによって再び「テキストを通じた諸文化の解釈」という具体的次元に引き戻される。これらの研究はすべて、理解という現象を考察して人間存在の本質を問う哲学である。こうした哲学的解釈学(philosophical hermeneutics)の系譜を引いた情報学者がカプーロであり、解釈学的情報学の主導者である。カプーロによって、意味の次元に着目した情報現象の解釈学(情報の意味内容の理解という現象の考察を通じた人間存在論)が展開され、さらに「メッセージ論(angeletics / Angeletik)」の領域が拓かれつつある。解釈学では、単純な意味伝達を認めない。そこには意味を成立させる様々な仕掛けがある。そのような意味を成立させる条件として、身体性や、社会的・文化的コンテクストのダイナミズムを理論的にとらえようとするのが解釈学である。

カプーロの解釈学的情報学は、ハイデガーに依拠している。注目すべきは、ハイデガーが「ヒューマニズム」に否定的な態度を取っていることである。そして、次の点に重ねて注意が必要である。つまり、ハイデガーが否定したのは「ヒューマニティ」ではなく、ヒューマ「ニズム」(humanism)、つまり「人間中心主義」(human-centered view)なのである。ハイデガーは、英語で「Letter on humanism」として知られるヒューマニズムについての書簡の中で、ヒューマニズムという考え自体への疑問を呈している。その書簡は、ドイツ語の原文では「Über den Humanismus」と書かれている。この über という言葉は、「～について(on)」という意味だけでなく、「～を超えて(beyond)」という意味を持っている。つまり、「ヒューマニズム(人間中心主義)を超えて」という意図が読み取れるのである。この問題意識は、ストレートにカプーロの解釈学的情報学に受け継がれている。

以上見てきたように、21世紀型の「ヒューマニティ」は単数形の「単一の善」ではなく、また「ヒューマニズム(人間中心主義)」に陥ることを警戒しつつ、「ヒューマニティーズ(精神科学)」としての解釈学的な問題意識を持ちながら考察される必要がある。

2 ログセオリー： フランクフルトにおけるヒューマニティと自由

オーストリアの精神医学者ヴィクトール・エミール・フランクフルトは、ハイデガー哲学に影響を受けた一人であり、「自由」をテーマに論じた 20 世紀を代表するヒューマニストの一人でもある。人間を、生理的、心理的、社会的な要素に還元するようなモデルに反対し、精神の自由性を強調し、固有の人格としての経験の唯一性を説いた思想家でもある。フランクフルト思想の理論面は「ログセオリー」と呼ばれ、それを臨床に応用した実践面は「ログセラピー(意味療法)」と呼ばれている。

本研究の観点から大変興味深いのは、 فرانクルが「ヒューマニスト」でありながらも「ヒューマニズム」に否定的なハイデガー哲学の考えを受け継いでいる、という点である。

フランクルは人間を「生きる意味を求める責任存在」と定義する。ここには二つの意味が読み取れる。つまり、①「人間の根源欲求は“生きる意味”を求めること」であること、そして②「どのような状況下でも、人間にはそれぞれの“生きる意味”が各人の人生から(あるいは人間を生み出した自然の摂理から)与えられており、人間には、それを発見し実現する“自由”と“責任”がある」こと、である。

①について言えば、フロイトの快楽欲求説(精神分析学ウィーン第一学派)、アドラーの権力欲求説(第二学派)に代わる、第三の理論的立場とも言われる包括的な立場にある。つまり、フランクルは人間の根源欲求を「意味欲求」と見ることで、快楽欲求や権力欲は、その「意味の充足」がなされない場合の代替(補償)作用として現れると考えたのである。第一学派、第二学派の立場からは、人間の最も称賛されるべき高次な行動が、最も低俗な理由に引きずり降ろされてしまうが、フランクルの第三学派の立場からは、むしろ高次な人間精神の現れこそが自然の結晶なのであって、精神の諸活動がうまく結晶できなかつた場合に、精神よりも低次な生理的快楽欲求、心理的権力欲求が優勢になるのだと考えた。そして、この「精神」はいかなる場合でも「自由」を持つ、というのがフランクル思想の核心である。

フランクルの自由論の特徴の一つは、人間が「制約を受けながらの自由」という状況に常に置かれている、と見る点である。フランクルは人間が「生理的」「心理的」「社会的」に制約を受けている状況を認めたくて、これらの制約「にもかかわらず」、人間の「精神」という上位存在はこうした制約を伴いつつ、むしろこうした制約に「対して」どのような態度を取ることも自由である、という点を強調する。そして、「いかに制約されている状況下であっても、態度として自由を発揮する力」が人間の精神にはあること、息を引き取る最後の瞬間まで、意識がある限りその可能性が残されていること、この自由性を発揮して自らが生きる意味を求め、見出し、実現することが、人間の人間らしさ(ヒューマニティ、人間性)であることを説く。

フランクルの議論はナチスの強制収容所で練り上げられた思想であり、戦争の世紀でもあった20世紀のヒューマニズムの結晶である。彼のいう「制約」とは、強制収容所の限界状況を体験した者だけが口にできる、過酷な「制約」をも射程に入れている。その意味で、きわめて底力のある強い思想である。だが、その強さはフランクル個人の精神的な強さに起因する面も否めない。つまり、個々人の精神力を強度に発揮せよ、というスローガンに掲げた思想なのである。個人の精神力に依存した立論であるために、近代思想の人間観の限界、つまり「个人中心」という観点の限界も伴っている。また、個人の精神面の自由を強調しているために、社会の次元における自由という議論も不足してしまっている。

この議論の限界を補い、フランクルの人間論のエッセンスを未来のヒューマニティ論に生かすには、個人の精神力に依拠した人生論的な議論を、別の観点からとらえ直す必要がある。以下では、「意味作用」を扱う学問的アプローチとして、生命的な意味作用としての「情報」概念に立脚した基礎情報学(fundamental informatics)の観点から考察を加える。

3 基礎情報学：ロゴセオリーの情報学的再定位

西垣通が提唱する基礎情報学(FI)では、システム論をベースにした情報理論であり、情報を「生命的な意味形成作用」ととらえている。FIでは情報を三段階に区分して考える。つまり、①生命情報(life information)、②社会情報(social information)、③機械情報(mechanical information)である。①は最広義の情報であり、生命体の内部(in)に形成(formation)される、言語化されないものを含むあらゆる意味作用をさす。ありのままの未加工の情報ということで、「原-情報(raw-information)」とも呼ばれる。②は、①の中で、記号や言語として具体化され、他者と共有可能となったものをさす。具体的には言語化された思考や感情のことだが、ここで言語化というのは、必ずしも音声化されたり、文字に書きとめられたりしていなくてもよい。頭の中で描かれた言葉は、すでに潜在的に他者と共有可能な状態にまで結晶している。それゆえ、潜在的に他者と共有可能となった情報も「社会情報」と呼ばれる。記録として書きとめられた社会情報が、機械的な処理に耐えうる形で加工されたものを「機械情報」と呼ぶ。これ自体は、生命体の認識する意味作用という情報の定義から外れるが、比喩的に言えば冷凍保存・乾燥保存のような形で意味が潜在化した物理的痕跡であると言える。

このようなFIの議論からすると、フランクルの言う「意味」概念とFIにおける「意味」概念とは同一ではないことが分かる。だが、両者はある種の包含関係にある。情報学的な意味、つまり、生命的な感覚であるところの「意味」の一部が方向づけられ、「意義」として結晶したものが、フランクルの言う「意味」、つまり「生きる意味」だと考えられる。また、フランクルの「生きる意味の探求」や「責任存在」という人間論的な表現は、このように結晶した「意義」を見出し実現する「可能性」あるいは「創造性」と言い換えて、再定位することができる。

フランクルが指摘した「諸制約にも関わらずの自由」は、FIの中心理論の一つであるHACS(階層的自律コミュニケーションシステム、Hierarchical Autonomous Communication System)の概念で説明できる。HACSとは、自律システム同士が上下の階層関係を持った状態をさす。例えば、法律のシステムは、社会システムの一つであり、この枠内で通常、我々は生活する。しかし、法律関係の仕事に携わる専門家でなければ、日頃から法律のシステムを意識していることはまれであり、普段はわざわざ法律システムによる拘束など意識せずに、日常を暮らしている。この状況は、法律システムという社会システムが上位、その中で暮らす我々という生命体(厳密には心的システム)が下

位のシステムとなる階層構造である。安定的な社会は、こうした階層構造を保っている。ただし、この安定はそれが「正しい」ということを意味しない。むしろ、HACS 理論の有用性は、安定した社会と見えるものの中に、「見えにくい支配構造」を見出す概念装置だという点である。何か特別にそのこと(この場合、法律)と関わりようとする場合に限り、そのことが意識の上に立ち現われてくる。そこで、「本当にこのあり方で良いのか」という反省が起こった場合、そのシステム全体への考察が始まる。そこへ導くのが HACS の役割でもある。

フランクルの「制約にも関わらずの自由」とは、まさにこのような状況をさすと言ってよいだろう。つまり、自分ではどうにもならない上位システムからの拘束を自覚した時に、それに対して「態度を取る自由」だけは留保されている、ということである。このように、人生論的な色彩を帯びているフランクルのヒューマニズム論を、FI の観点からとらえ直すことで、フランクル思想の補完的再定位が可能となる。

以上を手掛かりに、情報というキーワードで、個人における自由と社会的次元における自由の具体的な問題について、言論・表現の自由を例に考察する。近年、東洋においては中国の言論統制が世界的な問題となっており、西洋周辺においてはイスラム世界の伝統的ルールと西欧型の言論・表現の自由とが対立している。こうした状況について、伝統的な倫理学の考察に加え、情報学の立場からの分析を試み、今後の情報倫理の課題を導出する。

4 HACS 理論から見た言論・表現の自由：「言論の自由」は「絶対善」か？

最近、欧州で「ムハンマド風刺漫画掲載問題」が再燃した。発端は2005年9月30日にデンマークの新聞社ユランズ・ポステンが、「言論の自由」に対するイスラム社会の姿勢を批判的に問うという目的で、イスラムの創始者ムハンマドのターバンを爆弾に模して描くなどの風刺画を多数掲載したという問題で、イスラム教国と多数のムスリムの反感を買い、不買運動や、イスラム教国のデンマーク大使館の周辺ではデモや暴動、漫画家への暗殺未遂も起きた。これに対し、欧州各国のマスメディアは軒並み「言論の自由」を擁護する立場を表明し、イスラム諸国と真っ向から対立する形となった。

欧州を発祥の地とする「言論の自由」とは本来、新旧キリスト教会の宗教戦争の経験を経た「信教の自由」から発生したものである。そして、それは「個人(弱者)の、公権力(強者)からの自由」を意味しており、「強者の、弱者への自由」という意味ではなかったはずである。それが今では、マスコミという巨大パワーの、取材報道対象「への自由」になりかわり、信仰という最も深い文化的・実存的価値さえも貶める口実となっている。いったい、「何のための」言論の自由であろうか。「言論の自由」それ自体が目的化するのみならず、本来、それによって守られるべきものが傷つけられるとい

う皮肉な事態に陥っている。現代の「言論の自由」は、ここに重大な論理のすりかえがあり、方向性が全く逆転してしまっていることに気がつかなければならない。

近代ヨーロッパの代表的な哲学者であるカントの倫理学に従えば、他者の人格を自らの目的のための<手段>としてのみ扱ってはいけないのであって、同時に他者自身を<目的>としても尊重しなければならないはずである。欧州のメディア人は、ムハンマドを敬愛する多数のムスリムの人格を<目的>として尊重したと言えるだろうか。明らかに否である。欧州のメディア人は、欧州の代表的な哲学者であるカントの倫理学を学ばないのだろうか。それとも、そこには暗黙の例外規定、「自文化に属さない者には尊重すべき<人格>の存在を認めない」という二重基準があるのだろうか。事実、ユランズ・ポステンは2003年、キリストの風刺画を掲載することを拒否しているのだ。

もちろんイスラム過激派の暴力的な行動——他者を対話相手として尊重する前に、敵とみなして抹殺しようとする姿勢——も、相手を<目的>として尊重しない点で同様であり、それが国際情勢の悪しき火種となっていることは事実である。しかし、こと「言論の自由」「表現の自由」を盾に取る欧州側の言動に対しては、見えにくいからこそ、そこに巨大な欺瞞があることを指摘せざるを得ない。

このように、「見えにくい構造」に巻き取られながら「自由だと思って」暮らしているのが平均的な先進国の人の姿ではないだろうか。実際には、無意識に自分の考えだと思っていることでも、異なるシステムとの出会いによって、その構造が揺さぶりを受けることになる。このような認識の変容の中で、HACS が顕在化してとらえられるのであり、複数の HACS、異なるシステム同士で徐々に影響しあい複合システムとしてカップリングする場合もあれば、全く別のシステムとして作用し続けることもある。

先のムハンマド風刺漫画掲載問題は、イスラム社会の猛烈な反感を買うことで、目に見える形で反作用が起き、「言論の自由の正当性」が問われた事例であるが、日本でも（おそらく諸外国でも）、このように原点を逸脱した「言論の自由」が目に見えない形で横行している。犯罪被害者が「報道の自由」の犠牲となってプライバシーを暴露されたり、執拗な取材攻勢を受けたりする二次被害に遭うことも多い。犯罪者の側についての報道も、法治国家ならば本来、推定無罪（裁判で刑が確定するまでは無罪）を旨とするにもかかわらず、逮捕時点、あるいはそれ以前の段階での「犯人視報道」が日常化している。これを「言論の自由」「報道の自由」「表現の自由」と称するならば、それらは決して「絶対善」ではない。マスメディアという「超-社会システム」の優位性がもたらした、見えざる拘束の一樣態に過ぎない。基礎情報学の HACS 理論は、健全な企業組織などのあり方を論じるために使えるばかりでなく、逆に、こうした「見えざる拘束」という社会状況をあぶりだし、隠れた社会病理の芽や根を認識するために使うことができる。このように、自由と拘束との多面的、多層的なあり方を複眼的に認識することで、初めてその状況「からの自由」という「脱自存在

(Ek-sistenz) (ハイデガー)としてのあり方が可能になる。このような方向性こそが、フランクフルト思想の情報学的解釈による発展形態でもあり、未来のヒューマニズムを探求する有力な道筋の一つだと考えられる。

「言論の自由」が社会において「善」となるためには、その前提として、別次元での倫理性が要求される。「知る権利」や「言論の自由」が「善」と認められるのは、その「言論」や「表現」単独で成立するものではない。報道や言論・表現には、その発信者だけでなく、また、視聴者・読者だけでもなく、報道「される側」の人々がいる。報道内容は、種々の異なる立場の人々との「関係性」を伴い、その関係性の中で立ち現れる意味情報である。報道内容・表現内容の善悪は、他者あるいは「多」者(異なる立場の関係者)との関係性において成立するものである。倫理性というものを「多」者への配慮と考えると、報道「される側」への配慮が欠如した言論の自由は、「非倫理的」と言わざるをえない。

グローバル時代において、情報社会、あるいはメッセージ社会の中に生きる我々は、世界に十数億人いると言われるムスリムの異議申し立てを、どう受けとめるのだろうか？単に「言論の自由」「表現の自由」を金科玉条とするだけではすまされない。その前提となる「倫理性＝「多」者への配慮」について、もはや無自覚ではいられない段階に来ている。

ひるがえって、東洋に目を転じて見ると、中国、北朝鮮、ミャンマーなど、言論統制・情報統制が厳しくなされている国々もまだ多くある。それはそれで大きな問題であるが、他方、言論の自由が保障されているはずの日本では、どうであろうか。2010年9月、尖閣諸島沖で、海上保安庁の船と中国漁船との衝突事故があった。このとき海上保安庁が撮影していたビデオを政府は公開しなかった。中国との関係悪化を恐れたためである。しかし事実を隠そうとする政府への反発は大きく、ついに内部告発の形でビデオが流出した。この事件は、内部告発のスタイルを大きく変えたという意味で、インターネットという物理的情報ネットワークの存在も大きな意味を持ったが、HACSの観点からはそのみならず、次のようなことが明らかになった。つまり、言論の自由が実現していると思われていた日本において、実は、政府が他国や国民に言うべきことを言えなかった(言わなかった)こと。国民の声も、個人としての言論が自由であるとはいえ、日常的な言論活動の範囲ではさほど大きな力を持たず、政府にまで届く力はなかったこと。結局、「見えにくい支配構造」の中で、限定された枠内で、狭い自由を行使していたにすぎないこと。この「見えにくい支配構造」を打破するには、安定したシステム作動の軌道外のアクション(予想外のルートからの内部告発)が必要であったこと、などである。

5 HACS 理論から見た「知る自由」：インターネットは情報アクセスの自由をもたらすか？

最後に、検索エンジンを通じての情報アクセスの自由(知る自由)について、HACS 理論の観点から考えてみたい。周知の如く Google は検索・アクセスされる回数が多いサイトが上位に表示されるような仕組みになっており、このこと自体を問題にする議論も多く見られる。だがその点のみが問題としてクローズアップされている陰で、全く別の問題が起こっている可能性がある。つまり、高額出資者のサイトが検索結果の上位に来るように仕組むことも可能である。我々は検索エンジンを使って自由に情報検索しているつもりでありながら、提供される情報の元栓に手が加えられている可能性についてはさほど関心を持たず、また詳しく知るすべもない。検索されて出てきた情報がすべてだと思いがち。我々が知り得ないところで、情報アクセスに何らかの誘導や制限が行われている可能性は常に当然の如く存在している。しかし、我々は日常的にそれをほとんど意に介さないで使用し続け、提供された枠内での自由を満喫している。Google と Yahoo が統合した場合、情報アクセスに関する提供側の影響力はさらに増すであろう。情報メディアにかかわる研究者は、このことに対して自覚的でなければならないし、そうした「見えにくい支配構造」を繰り返し問題として取り上げ、可視化して世に提供することが課題ともなるだろう。インターネットによって「知る自由」が保証されるかどうかという議論は、検索エンジンのこうした誘導や制限の可能性を考慮し実証し得なければ、信頼性が足りないと言わざるを得ない。

このように、HACS の観点から自己と社会を観察することで、「見えにくい支配構造」が見えるようになり、そこから、日常の自己を脱却する「脱自存在」として、個人と社会の現在の関係、新たな関係を考察する手がかりを得ることができる。これは、ある意味では、メディアリテラシーの方法論とも呼べるだろう。ただ、その対象はメディア情報に限られない。人間の生の全体性であり、生命体としての我々人間が経験しうるすべての事象であり、それゆえ、ヒューマニティの過去・現在・未来を考察する道具立てでありうるのだ。

引用文献

- ヴィクトール・フランクル. 『苦悩する人間』. 春秋社, 2004
ヴィクトール・フランクル. 『意味による癒し ―ロゴセラピー入門―』. 春秋社, 2004
ヴィクトール・フランクル. 『意味への意志』. 春秋社, 2002
ヴィクトール・フランクル. 『制約されざる人間』. 春秋社, 2000
ヴィクトール・フランクル. 『「生きる意味」を求めて』. 春秋社, 1999
ハイデガー. 『存在と時間』(上)(下) 筑摩書房, 1994

西垣通『基礎情報学 一生命から社会へ一』. NTT出版, 2004

西垣通『続・基礎情報学 一「生命的組織」のために一』. NTT出版, 2008

